「戦史叢書」編さん当時の思い出

元戦史編さん官　福重　博

まえがき

私は、昭和 37(1962)年 3 月、陸上自衛隊幹部学校戦史教官から戦史編さん官として戦史室に転勤した。当時、戦史室の制服編さん官は殆んどが古手の一佐の方であり、三佐の私如きが何故と言う思いであったが、室長から「二、三年戦史を勉強させ、その成果を学校や部隊の教育・訓練に反映させる試み」と説得され、一応納得したつもりであった。しかしその後、「戦史叢書」の刊行が始まり、また企画班長への配転などにより、遂に定年退職まで転任はお預けになり、十三年もの長い間、戦史室に勤務することになった。

1　戦史室の組織・規模

昭和 30(1955)年、「戦史に関する調査研究及び戦史の編さん」を目的として戦史室が創設され、室長の下に、陸上、海上、航空の各班からなる戦史編さん官と、業務の企画調整並びに管理支援を行う企画班が設置された。

戦史編さん官は、かって陸海軍の中枢に勤務された旧軍人の文官編さん官と若干名の非常勤調査員及び之とほぼ同数の陸・海・空の一～二佐幹部自衛官の編さん官、合わせて約四十数名からなり、各班に勤務する二、三名の編さん官助手を加えると、編さん官室は総勢五十数名にも達する陣容であった。

一方、企画班は庶務・会計係、史料係、印刷係からなり、一等陸佐の企画班長の下、制服自衛官と事務官合わせて約四十数名で構成され、一意、編さん業務の支援に当たった。

戦史室の総人員は、多いときは百名に垂んとする大所帯であった。

2　「戦史基礎案」の作成

私が編さん官になった頃は、未だ「戦史叢書」公刊などの話は全くなく、各編さん官は、夫々の命題について、鋭意史料の収集に努めながら史実を解明し、「戦史基礎案（第一案)」の作成に専念した。

執筆完了した基礎案は、室長臨席の下に開かれる合同研究会に於いて、陸海空の関係編さん官によって詳細、厳密に審議された。合同研究会は十年間で三千回以上にも及び、作

成された基礎案は、実に二十四万頁もの膨大な量に達した。基礎案は「太平洋戦争史」編さんの際の基礎となる資料であるが、戦史室長は、当面、自衛隊の各学校、部隊等において、戦史の研究や教育、訓練の資料として広く活用されることを強く期待しておられた。

一方、戦史史資料は、個人や各種団体、関係機関からの寄贈や収集、多数の歴戦者からの聞き取り調査の記録等の蓄積によって、次第にその数が増大した。殊に、昭和 33(1958)年 4 月、米国から約二万数千件に及ぶ押収史料が返還されるに及び、これらの資料を安全に保管するため、昭和 35(1960)年、無窓、防火、防湿設備完備の史料庫が完成した。昭和 40(1965)年頃の保管資料は約十四万件に達し、戦史室の体制は名実共に益々充実した。

３　「戦史叢書」の刊行

その頃から戦史室の存続問題とも関連して「戦史叢書」公刊の議が興り、昭和 41(1966)年度から十年計画で、陸・海・空合計九十一巻の「戦史叢書」を順次に刊行することとなった。私が担当した『中部太平洋陸軍作戦』は、基礎案がほぼ完成していたので、比較的早く、昭和 42(1967)年 7 月と翌 43(1968)年 2 月に、二部に分けて刊行された。

この戦史叢書は、海軍の邀撃作戦構想の基に、昭和 18(1943)年初頃から中部太平洋方面に派遣され、二十五余りの島嶼に配備された約十六万に上る陸軍兵力の戦略的意義と効果、及びその作戦について記述したものであるが、特に米軍の上陸進攻により玉砕したサイパン島をはじめ八つの島における作戦を重点的に取り上げ、島嶼に於ける対上陸作戦と陸上戦闘の実態解明に努めた。しかし、何れも史料不足のため史実の解明が極めて困難で、殊に敵上陸以後の戦闘経過については、生存者が少なく、その記憶も局部的で不確実なものが多いため十分に史実の解明が出来ず、止むなく米軍戦史を参照して全般の戦況推移を把握せざるを得なかった。

刊行叢書の原稿は、既述のように、厳密な審議を経た基礎案に基づいて執筆したものであるが、執筆完了後、戦史室内で詳細に審議して防衛研修所に持ち込み、副所長以下の陸海空所員による審査を受けた。しかし、これら審議、審査の全過程に於いて、旧軍時代の陸海軍対立の残滓が依然として存在し、それぞれの立場を擁護しようとする空気が濃厚であった。その結果、一部、史実の省略や削除、文章表現の変更等を余儀なくされ、執筆者としては納得出来ない点も少なくなかった。

「戦史叢書」も刊行開始から四十余年を経過し、その間に新たな史料も発掘され、史実の間違いも散見されるようになった。この際、改めて史実を精査し、過去のしがらみや特定の史観に捉われることなく、真に正鵠な戦史が書かれることを念願して止まない。